

『琅』二十九号への手紙③

―「語り継ぐ大切さ」

井口光児

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

黙禱をされるシーンや、熱戦が繰り広げられていた甲子園の高校球児が、プレーを中断して、帽子をとって、黙禱を捧げる姿を見て、年中行事のような感覚で、正直、余り重くは受けとめてはいなかった自分がい

た。今年8月15日、あの戦争が終わってから70年も経ったのだ。ちょうど終戦の年、1945年に生まれた人は、今年、70歳で高齢者である。終戦の年に生まれた人の戦時中の記憶はないと考えられるので、当然、体験談は話せないだろう。1935年生まれの方は、80歳。終戦時は10歳だから兵隊の経験はない。疎開や空襲の経験なら話せるだろうか。

後5歳さかのぼって、1930年生まれの人々も15歳だから志願しての海軍少年飛行兵の初年兵でぎりぎりの年齢である。女性も、学徒勤労動員か女子挺身隊の経験しかないだろう。つまり、軍隊経験を知る人は、徴兵年齢の19歳以上の人々ということになる。1945年に19歳ならば、

帰った経験をしたようである。また、食糧事情の厳しさや、配給生活のつらさを話してくれたことはあった。義母は、14歳、国民学校高等科から、学徒勤労動員で、阪急梅田駅の改札員や券売業務をしていた。出征で、大人の男性が極端に少なかったたので、動員されたようである。たびたび空襲に遭い、付き添い指導の教師の指示で、阪急百貨店の地下2階に避難したらしい。終戦後は、そのまま、梅田駅の構内アナウンスの業務に就いたと聞いた。

このように私は、たまたま肉親の体験談を聞くことはできたが、みんなが進んで戦時中の経験を話してくれるとは限らない。特に、軍人として出征した人の中には、思い出したいくないとして話すのをいやがる人もいるし、年齢が高くなると記憶もあやふやになりつつあるのだ。

平和で豊かな時代しか知らない私たちは、先の戦争を経験した人々からの不戦の思いをどう伝えるのか、大きな課題である。学

1926年(大正15年・昭和元年)以前の人々しか体験を語ることはできない。1番若くても、90歳である。そう考えると、上記の新聞記事の内容に納得がいく。ほとんどの戦争体験者が戦場ではなく、国内での銃後の生活の経験者になる。ただし、唯一地上戦が行われた沖繩やサハリンに住んでいた人々、中国大陸など外地からの引き揚げ者は、想像を絶する戦場を経験した人もいるだろうが、生死の狭間で過酷な状況をくぐり抜けた方々の数は限られているので、経験談を聞く機会は多くはないと想像できる。

以上の現実をふまえて、私たちは、21世紀の世の中を背負う今の子ども達に、先の戦争の何を伝えることができるのだろうか。修学旅行の広島で、被爆体験をした方々のお話を聞く機会はありますが、年々高齢化が進み、語り部の方々の数も年々減ってきているのである。

実は、私の父母も妻の母も昭和1桁生まれである。父は、終戦時に17歳であった

が、軍隊経験はない。徴兵年齢に達していなかった。ただ、空襲に遭遇した経験はあったようであるが、子どもである私に話してはくれなかった。父の話聞いた方からの又聞きで、当時、関西学院の学生だった父が、旧川西航空機の飛行場であった阪神競馬場の近くでB29の爆撃に遭遇し、墓に供えてあった花の水をかぶって、逃げたという経験があったそうである。調べてみると、1945年7月のことであった。父は、食べ物好き嫌いほとんどないと思っていたのであるが、カボチャの煮付けや蒸したサツマイモなどをあまり好まなかった。戦中戦後の時代に、カボチャやサツマイモばかり食べていたそうで、うんざりしたと母に話していたらしい。

母は、12歳。縁故疎開で名古屋から姫路の南部に一家が移り住み、都会からの疎開者だということ、はじめを経験していた。1945年6月22日9時頃、女学校の近くに川西航空機姫路製作所の工場があり、空襲警報発令直後に逃げて、家まで走って

校では、『平和学習』としてあるいは、歴史学習の中で、事実を学んでいる。また今、世界で起こっている戦争について、報道から知る機会はある。そこから、何を感じ取るのか、どんなことをこれからの人生に活かしていくのかは、小学生の発達段階で学ぶだけでは、不十分である。だからこそ、子ども達には、これから先も、学校を卒業してからも自ら学ぼうとする姿勢を大切にしたいのである。

本校では、5年生3学期から6年生にかけて戦争と平和をテーマにして総合的な学習を進めている。総合的な学習の理念の1つに『学び方を学ぶ』ということがあるが、与えられた課題や、お膳立てされた経験だけでは学びは深まらない。自分で学習課題を持ち、その解決に向けて、何をどう調べればよいのか、調べたことをどのようにまとめ、どう伝えていくのか。私たち教師は子ども達の学習の進め方の的確な指導をしなければならぬ。並行して子ども達には、これからの人生を歩んでいく中で、戦争経

験や平和に関わることで自分に語り継がれたことをさらに若い人たちに、語り継ぐ役割を引き継いでいかなければならないと思う。

では、語り継いでいくための材料は、どこから入手すればよいのだろうか。私のよりに聞き取りの機会があれば、身近な人の経験談が得られて興味深い。当時をえがいた小説を読んだり、映画を見たりすることも勉強になる。博物館や資料館も実物にふれることができる。テレビドラマやドキュメンタリー番組も役立つし、新聞でも定期的に特集が組まれている。正しい情報を得なければならぬが、まだまだ、真偽が明らかになっていない出来事も多い。南京事件や従軍慰安婦の問題は、議論の余地を残したままである。靖国神社のA級戦犯合祀の問題や原爆投下の是非についても甲論乙駁である。

子ども達には、普段の生活の中から多くを学び、多様な考えにふれ、自分で自分の意見を持てるようになってもらいたいと思

う。さらには、できるだけ親や祖父母も交えて異世代の家族間で学び語り合える機会を多く持てば、有意義な時間を共有できると思われるがどうだろうか。

戦後70年の2015年、この1年間、私は、語り継ぐリレーのための学びを深める絶好の機会であると思っている。各種マスコミでは、8月15日に向けて、様々な特集を組んで報道するだろう。戦争を『語る』ために過去の知識を得たり、それをもとに話し合ったりする経験はできる。その経験を積み重ね、後世にリレーのバトンを渡していきたいと思うのである。この機会に私も娘達とともに私の父母を訪れ、経験談を聞き、語り継ぐための『勉強』をしようと考えている。

(二〇一五年初春)